釋迦御一代記圖會

三

第三号

へ13
4039
3

釋迦御一代圖會卷之三

目録

浄居佛三試悉達太子
浄居佛化比丘試太子圖
諸童子爲太子語諸國地理圖
悉達太子暗知檀特法其
悉達太子出宮中赴檀特山
耶愉陀羅女与太子悲歎留別圖
悉達太子赴檀特山圖
悉達太子託遺物車匿

昭和42年12月12日 和田大作氏贈

へ13
4039
3

迦毘羅城騒動車匿獻遺物
悉達太子於檀特山師阿羅々仙同圖
悉達太子於般若臺師伽羅々仙
天女霊鬼告因位善悪應報
耶輸陀羅女生若宮
悉達太子苦行雪山降魔軍
悉達太子得四句偈正覺成道
霊鬼授悉達太子四句偈圖
三迦葉師釋尊
三迦葉帰伏釋尊圖

釋迦御一代圖會卷之三

浪華　好苍堂野亭考選

淨居佛三試悉達太子

伽夷衛國王乃愛女耶輸陀羅女悉達太子乃新宮ホ備リ〳〵後ハ歴野瞿陀孫乃両女と俱ホ三妃太子乃左右を片因も去ど絲竹を綱ど歌舞を奏ル只管太子乃御心を慰ムるとハ曾て閨門ハ入ム事なし三新宮ハ望を失ハ高岩の花をなかいる心地ヨ幾ホ嬌雲補夫人ハ淨飯王の内意を諾耶輸陀羅女婚姻乃後ハ治定枕席を交ヱ玉ふらるゝ日々ホ新宮ホ仕る女官を召て問のべ給ふ枕席を俱ホ玉ふ事ハ体乃ゑ玉ハぬとゝ予ホそ夫人心を困ム入潜ホ耶輸陀羅女ハ下三新宮と招く仰ケるハ抑太子の御吏何なる宿因乃幾ヒるホや只富貴歓楽を欲ヒ給ふど裳心修行乃ゝ玉ふ事ハ如何ぞ好ム大王余ホ皇子ゝそも不在ど只此事を憂ゑ給ふ若宮中を潛出ム事ハ疾とく城乃四門乃扉閉乃音四十里が間ホ音ヲホ造設ム夜三千人乃宇宙乃監率を置ム宮内ホハ容貌風姿勝ル女童女三千人

を待て且普く諸國を尋ねとる。御身等三人の新宮を備へ給ふも何事か出家学
道の念を断て王位を受禅ふ人事を欲へ給へり。然る三人も太子の御意と慰
出離の思を断て輪王の位を踏み給ひ計ひ給ふ社貞操も孝行も有り。夫
女の身ふ三の怠あり。第一ふ嫉妬の怠なり。竜を争ひ愛を貪る心より自然不
良の心生じ嗔恚の焔ふ胸の鏡を曇せ君の護を怠る変あり。是第一の慎なり
二ふ慢心の怠なり。君の覚めでさへ人の尊敬重んじ自然心憍りて其色外ふ顕れ
むつまじく人の妬を猜善事ハ云隠され悪事ハ見露され纔に言重りてハ却て君の疎
を猜心屈して怠を生ず。三ふハ睡眠の怠なり。終日の動仕ふ心倦たれ夜ハ不覚熟
寐して君の護を怠なり。此三事を能く慎め何事か君の御意を練る者宮の出来
さるを如何に対ひ給ふと教訓ふ三人の妃ハ骨身ふ徹りて忘れず感涙
ふ袖を濡し慎て領掌し夏より三新宮互ふ妬を恨む心を慎て相助て太子ふ奉仕
し給へ。顧て出塵の御望を断て無為ふ彼浄居佛ハ先ふ老病死の三苦

を以て太子の道心を勧め給へり。今三人の新宮ふ縋て太子の春情を誘ひ
天眼通ふ尽て太子を三女の色香ふ惑され道心忘れ給ふと疑の神通を以
て太子の心ふ出遊せん事を思ひ給ふ是ふ依て太子野外ふ出て游ぶ事ふ思ひ
鳥将軍を召れ丸久く宮中ふ在て稍気鬱を生ず。依て郊外ふ游ん給ふ思
ひ給ふ。御父王ふ奏して勅許を願ふと余ど王ふ鳥将軍奉り王宮祭
り。太子外游の御望有ふ哀奏を聞ふ浄飯王曰く先ふ太子の意を慰ん
外遊を勧ふ老者病者死者有ふ却て太子の心を憂ふ為ふ是何者か
障碍なる事を尋ねて其ハ太子の出家学道ふ妃を怕ふ為
然ふ太子ハ外遊せんと思を遮り停ふ忍ふ汝眺望ふ外野外ふ行
宮を造り。太子を伴ひて官人ふ俱ふ宇獲ふ猶五十里の外東西南北ふ一千
人ふ禁兵を置く其不虞ふ備へ太子国を潜出んと思を遮り留ふ先
且外宮ふ余ふ道路を灑掃ふ老病死ハ人を更ふ臭穢不浄の者を八在

しむる事なれ。今般太子の心を憂しむる者を置て決しく刑戮を免さずと
厳ふ令し。烏将軍慎ぐ宣旨を奉り。退出して月景城ふ回り。太子ふ男しく
勅許のみもむたを言上し。百工ふ命じて城北の眺望ト所ふ行宮を建し。先る
ふ不日ふして造営成就しぬれば。御遊の殺残る方なくなり。城外五十里四方ふ一千の
禁兵を屯さ屯さ不意の備をなし。准備十分綱くに其旨太子ふ啓白せ。是ふ
依く悲達太子。烏陀夷をもめく。童男童女を将さ月景城を出ひ。此般
八寮の御馬ふ召さ城の北門より郊外の行宮さして歩ませむ。三新宮ハ後宮
婇女を従へ車ふ乗じく陸逐ある烏将軍ハ教導とく先ふ進む。新ふ営し行宮
ふ着じ入とり酒宴を催し妓楽を奏して慰進しせり。太子ハ逸楽を好さむハざれ
ど。女時あく烏陀夷父下十余人を従へく。野往を逍遥し遠近を眺望しふふ
一大樹繁茂し其下ふ平博なる石有く。青苔緑の毬を布くる如くなれば。太子
甚く愛しむひ。烏陀夷ふを顧く曰く。汝達ハ此所ふ待よ。九ハ彼石上ふ憩て風

景を眺ぶしく唯一人寛ふ歩く彼樹下石上ふ端坐しひ静ふ思念してぞ御坐
すと其河浄居仏化して一人の比丘となり。雑髪して法服を着し右手ふ錫杖を
策左手ふ鉄鉢を把く来る。烏陀夷父下の者ハ瞬もせずと太子の動止を守れど
も曾く此比丘を見る事なく唯太子のみ御目ふとまり向く曰汝ハ是何者ぞ浄居
仏答て曰貧道ハ是比丘なり。太子曰何ぞ比丘となるや答て曰餓又子夫婦の愛著
を新輪回を離く是を比丘と謂り。太子亦問ふ何ぞ故愛著を捨輪廻を断や
答て曰一切衆生皆五濁の為ふ身を汚し六欲の為ふ心を惑されて老病死の迅速
なる事を悟ず生死の苦海ふ沉淪して無上菩提の快楽有く我不知我が修学を
ふ所ふ如ハ色聲香味觸法ふ犯著せず無漏聖道ふ心を持しの遠く八苦の海と
迷解脱の岸ふ着無為の都ふ到るなり。それ王侯貴人より八下一切衆生の世ふ在
て一ツ乃井裡ふ陥り半途ふ僅の小草有ふ取着下ハ臨を毒竜ハ口を張て
陸地ふ呑ん勢を以て上を望む悪虎牙を怒して上ふ喰ん待ち上る難

浄居佛
比丘と化して
恭達太子
魚常と云ふ
図

諸童子
恭達太子と
諸國の物語
する図

く下ふ難く剩へ力ともる小草もと黒白の鼠来て其根を食が如しぐれど妻子
珎宝及び王位の貴き特おもこそ。一ときび無常の刀風に遭ぐ悉く解るん噫呼危哉
るかと却うるに忽然として満身金色の光を放ち端厳妙相の佛と化し虚空に騰り
く去却。太子悔恨として紛く悟りむい。偖八緒天仮に比丘の姿と化し出家功徳の賈
大なる事を説示しむ人ぶこと。善哉々々天人の中唯無上菩提の道勝まり。九誓て
此道を学び天人ともに化度せんと大道心を決定し。昸の雲霧去霽く。新に真如
の月を見る如く。歓喜踊躍に勝むなど。鳥陀夷を近く召し。九今日甚だ楽しき
いと還をしと曰ふ。鳥陀夷曰君多く此行宮へ入せむいまだ半日だも過しむなど。帝ハ
猶暮るまぐ御遊あるせむと勧なれども太子頭を振むひ。否楽ハ極なくなど。早く
帰路を促せよと仰るぞ。鳥陀夷已夷を得ぞ。鳥将軍に其旨を告太子を密輦に
乗せり。三新宮及び許妻の宮女の前後を囲繞し。終に月景城へ還幸ありまりぬ
此日破利舎那城の好客夫人皇子を産む。是を後に難陀太子と申すなり。浄飯

王の御歓ハ尽も更なり。満朝の百官より末を民間まぐ萬世を唱て祝しまりぬ

悉達太子晴知擅特法臺

難陀太子降誕に依て。王宮賑ひむ。独悉達太子のみ。郊外に於て比丘の説
を聞むひしより愈出塵厭離の念。崑崙の嶺よりも高く。如何もして宮中を潛出
ぐべと思ぶる。那里に到て一段心の師を得ぞと思煩むひ。貶と心著むひ滅や
人の絡り草ゆ。十人絡ぐ十里の夷を知と縛り。臣下の息男の中に智有るも
ぬ呼聚四方八方の夷を絡せ。宮ぐ。自並段心の師の在所を知こるもあらじ
憍曇彌の御許へ使を遣れ。九此頃ハ頻に心窮。緑行の音を聞へ。何卒
緒卿の子息の中に。才智ある者を数人召寄むへ。其に物語させ。意を
慰ひ人と申せ。母夫人宣むひ。是ハ並るぐ御心慰なろうこと。王宮へ其旨
奏しむに。浄飯王も理に思召屋光臣に命じ。月卿雲客の中に。年才有
息男代擇せ。即ち十三人を擇出して。太子の宮中へ進せり。太子大に

悦ばせ給ひ。其童子等を御前に聚て昼夜種々の物語をさせて聞せ玉ふ。児童們
は與ある事に思ひ。己が随思見聞せる事を。或は虚誕とりまぜて。ちぢくに語
る。太子は唯出離の師を需んとの方便なれば。もちつけにおもふ事を問で。自
然世に浅く。宮中に潜出ざれば。妨になるべけん。不如吏に託て其緒を曳出さんにはとぞ
されぬ体なく。衆童に對て仰けるは。いかに你達天地の間に住るもの生とし生る者
も皆丸が如く心をよく友を聚て遊ぶやと仰出されければ。一人の童賢ぶりて申やう
さん候皆それぞれの友あり得て遊び候なり。然ども亦品を易る事のは先龍は諸虫に
して諸虫と鱗介をかくべし。麒麟は諸畜にして諸畜と脚蹻をもて様ざりて
すれ然ども是等は情なき者なれば。友を以て己が情を見しむへなし。羊時も友
を離るる。人は萬物の霊にして心を以て友とし心の合ざる者友とせず。然ば我を
まもらんと欲せば其友を見るべし。古の聖賢も如し語りぬ。然に一人の児童進出
會釈の上は。いかに形を以て友とする事多論なり。但し人間の上に於て。心を

友とする事信なし。親子兄弟形容は似ても心は各々なれば。呪他人に心の斉しき人は
有ざれども其人なしとて我が心を我が友とし。独慰む者有べからずやとも難じける。先
の童子が曰是は頑にも申たり。実に心なる人の上は論なし。吾がいふ道ある人の上
を論じ候なりといふ。後の童が曰其道とは如何なる事にや。言の序に承りたんと
どいへる。先の童子が曰吾も精しくは不知候へども聞及べる程は語り候べし。それ世上に道と
称る者数限なしと雖先文道筆道音声道糸竹の道歌舞の道陰陽家の
数天文地理或は弓馬軍戦の道其余は枚挙に遑あらず。是等は尚技芸の
道なれば且さしおき。真の道と号するは心を友とする道にして。所謂賢道明道
聖道の三道なり。賢道と謂は発心報謝の道にして。金仙の修する所。明道と
謂は明始験者證家の秘事と承る。聖道とは仁義撫育の道にして。国土
安全の大道なり。此三道の外にも学究し人ぞ真の人とすなりと答。後の童
又問て曰聖道は世に有事誰も知所なり。唯賢道明道と云道を不知そも何国

ふいや答て曰我も往こゝ八又ゝ此國の天門ゝ當て行程一千三百里を隔て檀特山の峯嶺より雪山医王ゝ黎山青龍嶺ゝ西維ゝ伽陀山毘羅阿私陀般若山僧伽羅肩陀金剛胎ゝ人ゝ衆の法の峯ゝ此ゝ賢道無為の神仙心を友ゝ行て住ゝ亦鬼門ゝ當て一千二百五十里の行程を隔て阿耨山阿私陀山喜羅々阿闍部妙見臺ゝ羅々阿羅優鉢羅山ゝ人ゝの靈山有皆是明始驗者の行ひも及ぶ所ゝ及ぶ事ゝ是ゝ世ゝ所ゝ

やゝ久ゝやと言語とゝ絶て後の児童言句ゝ結り赤面して口を閉ぢ太子八始より二人の問答を聞て驚ゝ幾心修行の名山を尋ゝ心中御喜悦限なし是ゝ

ゝ緒天九ゝ幾心を憐ゝ此児童ゝ純て言ゝ聞ゝ感慨ゝ

ゝ躬中ゝ仰ぐ八実も珍ゝ物結を中ゝ所ゝ但一千三百余里の行程八陸路ゝ海路ゝ問ゝ先の童子ゝ曰五百里八陸野道ゝ民家ゝ五百里八谷川道ゝ或八大河或ゝ函谷ゝ渙夫山賤の拙ゝ在ゝ甚ゝ難路の〻〻三白里山道ゝ尤嶮岨の〻〻承りぬと何心ゝ結り多ゝ太子ゝ

ゝ八偖ゝ往ゝ離ゝ是ゝ出離の先達ゝ名ゝ心ゝ収ゝ諸童子ゝ

ゝ労ひ汝達の物語ゝ日来の酔を晴ぬ今宵八夜も更ゝ来

ゝ語り慰ゝ貴衣を賜ひ御ゝ下ゝ名ゝ諸童子ゝ大ゝ悦び君恩を謝て宮中ゝ退出る

悉達太子出宮中ゝ檀特山

其后太子八彼児童ゝ問答を胸中ゝ紀ゝ都城より天門ゝ一千三百里彼方ゝ檀特山ゝ分登幾心の師を尋ゝ年月の宿意を遂ゝと思ひ浄飯王の法令ゝ厳ゝ假初の御出遊ゝ數多八官人前後を囲繞ゝ後四門の守衛固ゝ宮中ゝ潛出て使ゝ心ゝ乱ゝ春と暮ゝ秋と過ぬ御年十九歳ゝ成せ玉ひる太子頻ゝ御心苛ち斯て宮中ゝ在ゝ何ゝ成道の時有ゝ好ゝ此上八父大王母夫人の貴意ゝ背ゝ一度檀特山ゝ到ゝ心強ゝ思ひ維ゝ

宮中を潛出でたし人々ホ心を附さ窺ひあ
陀羅女ホ勝る今宵一夜更闌人定りて後太子耶輸陀羅女を御身近く招寄
ひ平日とても別して御物語ありて偖仰出されるハ樹の蔭ホ宿り一河の流も
戎汲も一世なりぬ奇縁と雙増さ況丸と御身と夫婦となる吏因位の契深くれば
なり然ば御身ホ丸が一大事成明し頼さ義あり承引ぐられや否と曰妃ハ色成正し
是ハ改なる仰る自ら國を出し河より命成君ホもり故郷の父母同胞を成も顧ざ
君の御爲なら煙の中も入水の底も赴た待ぞ何吏ホまれ仰を背ハ下とぞ
答る太子悅ばせ給ひ其赤心を尽るハ何を色むぐ丸ハ普通の人ホ変り母夫人の
胎内ホ在こと三年ホ成ひ萬の苦悩を入せ給ひ出産の後七日ホして実の母君
ハ逝去ぬ然ば其菩提を吊ひ且ハ一切衆生を化度せん爲ホ出家学道の望年
年なり然ども又大王姨夫人の慈愛ホ忍ばされ今日まで八默止されども丸已ホ十九才
今出離して何時なり期を定て依て今宵宮中を潛出ん思へり御身潛ホ引

路して宮門成用紀丸を伴ひ出ん思へ仰れば妃ハ胸塞りて御望あれば
こそ先須御母夫人の微細と教訓ひ給ひ此身の浮沈此時なり太子の御心ホ
後ぞ御母公の御恨を受ん母公の恨を受ども太子の御心ホ背くホ至る是ハ
如何せんと思困ど両の眼より湧出る泉の如く何と答ん紛ぶなく只平伏し泣
居ひれば太子ハ顔色を損じ給ひ是ハ言甲斐なく心ホ此宮中ホ丸が言を背
ば者ハ御身ハ思ぞ一大事を告れ並を猶承引じとぞ七百
生の契を断丸自出ぞ突然起ち成妃急ホ抑留ハ如何なる御
吏ぞ誓なり約を違背ば遁ん此宮中ホ居り新宮ホ備へ入名の
一度も義成ホ背ば今飽ぬ別をなるさんホ御又大王御母君の
問ん何と言くとも潛出ん成知ぬ自を責恨へば
と御一方ハ有く甲斐なく玉の緒の絶ぬなれ恨なれ赤伏沈くと泣ん
太子ハ其心中を察し給ひ御衣の袖を沾し給ひ右の手の風指ホ妃の

懐を指むひさゝゐ深く歎むひと丸御身と枕席ハ変ずれども今日より三年の後必
ず男子を産ゞ丸斐心修行のうち自然死去せる遺孤ゝ育むへ長
物絡を入ゝ世せく覚られぬ悔るも更ゝ甲斐有まじ早くと忙せ玉へ妃
も唯夢ゝ夢ゝ心地ゝ是非なく局々の扉を開ゝ曽く浄飯王に返ゝ
命ゝ何所の扉を開くも其たる音宮中宮外ゝ音くせゝ造せ玉ひ
も此後ゝ限りく些の音もせざるゞ不測なりける太子ハ妃の教導ゝ隨ひ殿裡
を潜出玉へる女官女童を顧玉ゝ或ハ楽器ゝ倚卧或ハ綱度ゝ戯れ熟睡せ形
さゝ木偶の如くさも雅飾顔も美せられ唯革嚢ゝ臭穢を盛強く
飾ゝ紅彩を以て薫らせゝ香草花ゝ世のきなれど最浅猿とおもひつ
幸くく宮外ゝ出ひ耶倫陀羅女を顧て曰く偖老の契是ぎなり丸修行
の功を積正覚成道せゞ再び相見る期あるべれども老女不定の世界夫ゝ豫期
難く丸ゝ母夫人ゝ暇を仕へ孝貞怠り玉ず変なれくく早く出んとおもひを

妃怕くく御衣の袖ゝをゝ着君御一人何國へ行玉ふ剣山刀樹の責ゝ苦ゝ自
然伴ひ玉へとも口説絶も入ゝく泣玉へ太子看を振ひ抱著ハ無明の扉大宅ゝ留
て菩心を焦せり信心ハ婆を出るの劍煩悩の絆を断く浄利ゝ到るよりも
歎ぜ人より疾宮中ゝ回り夜明く後丸行方を人問ど唯ちくと答へて心
強も袖を拂玉ゝ妃ハ猶も泣入く放ち玉ハざれど羅穀の御袖ちと裂く妃う
手ゝ取ぐ太子ハ扉を引き其まく廐ゝ到り玉へ妃ハ片袖を身ゝ添く声哭も
立ぎ泣ひゝ斯く果ゞ紀吏なくねど泣々起上りく局々の扉をもとのごく
鎖固内の国ゝ入只紅涙ゝ流れ玉心の内を痛くく斯く太子ハ廐ゝ到ひ車
匿太子の馬の口取の名ゝ在と呼玉其御声車匿ゞ耳ゝハ雷霆の如く驚くと答く実伝
起出太子ゝ成人なりく大ゝ孩紀吏ゝ所をちゞ太子車匿ゝ對ひ丸御音
あるゞ犍陟を曳と曰車匿培孩紀時今深夜ゝ出遊玉へ紀何ゝ子將
太四竟太平無事ゝく逆敵ゝ寄ろゝ何ゝ科ゝ御馬を召さんやと怕る

悉達太子
檀特山ヘ
赴きの図

く難くなる。太子気を苛めひ小賢吏を中者らお你ちてを無常の殺鬼攻
来る吏速なり。丸一切衆生の為ふ吏を降伏せんと思ひ吏を言ひて曰く
犍陟太子の乗馬を牽出せよと責ひ車匿猶ほ首を振大王の勅ひ太子
も一夜中ふ出遊せんとせば烏将軍ふ紙へ其後禁門守衛の官人ふ告ふ
叫吉ふ背く者ハ罪九族を夷ゑんと厳しく命じ先烏将軍ふ達し後
御馬を牽ける所ふ太子甚ひ憤りひ你尚馬を牽ことあらば
丸煩悩の結賊を降伏の手始ふ先你を縛しと佩ひ宝剣ふ御手戎け
ひへ車匿戦栗し叫ぶ守衛の兵を呼んとれども不側中一声も叫ぶ能ハず
茲ふ於て已吏を得て寮の駒を牽出して進せる太子色戎和げひ
綱を引て乗ひ牽出ると喝令ひ車匿亦躊躇して曰君知ひ給ふ大
王兼て太子の宮中を潛出ひ人吏戎慮ひ五百余人城門の周囲を度其
きしる音成て四十里余響き渡ふ借て且数吏ハ監牢を置く時ふ守也

ひへも手ふ眠く出ひ吏ゑを天を仰く長歎しひ意中丸ゑ志
願茲ふ到て空く空しくあるやと曰と笑ひ空市ふ浄居佛ふ緒の善垂来給ひ
神通力を以て城の北門を開ひ大門已と開ひ一点の音もせず
監牢ふ熟睡して不知茲ふ於て太子歓喜踊躍しひ車匿を属て城外へ出ひ
城門を過ぎしの如く開ける。太子八宮殿を顧ひ獅子吼して誓て曰く我若不断
生老病死憂悲苦悩不還宮又復不住於法輪要不与父王相見若當不尽
恩愛之情終不還見母夫人及耶輸陀羅女と斯の如く誓成ひ金剛
の金殿王樓を捨恩愛の父母妻妾成ハ不顧盼をも今ハ擅特の峯嶺を
望ひ一路ひ人ハ何の為ぞや唯一切衆生の煩悩成救ひ極楽浄土へ引接せん
この大悲願なり。難有ける御裁心ふ在る。誓て緒天ふ感意まり。太子の
御馬の前ふ持国多聞増長広目の四天王先駆して悪鬼の障碍を除ひ。真
他羅刹天風天火天水地陽天金剛明王梵天帝釈迦羅睺浄光天飛行無辺自

在天并び諸天太子の前後を囲繞し神通方を添ふ馬も車匿も我が雲
に乗り陸野道谷川道山陽道を唯一後の間かたしと地後の明方かハ一座の
高山に着せ如ハ多ハ不測とも疎なり今

悉達太子 既遺物車匿

斯く太子ハ山中の平なる所に馬より下り遠近を眺望し給ふ同所れは奇樹異草爾
茂し香風吹て四方に薫し霧千仞の溪を埋み雲萬丈の山嶺を覆ふ寂寞
無人の場なれば御心清々しく歓喜に勝ぬ車匿を顧て仰せらるハ如何や車匿承
れ十善万乗の位も唯是夢中の栄花に過ぎず千花万花ハ眼前の塵埃なり増て
や愛執妄念ハ煩悩の薪なり無明の猛火に焼る人妻必せり豈厭ふべきと
曰へども車匿ハ宮中より出しより我を恋ひて忙然として有無の答をなし
る所に人の足音聞えれば嬉しや人こそ来れと檀特山に住る道を問へ其方に
向ひ待ちて来る人を見れば身財ハ拙く木の皮を編て身

に纏ひ杖に寄て枝を来て杖に付て肩に掛り手に異の花瓶を提げ其形容
しく塵俗を離れて太子声をかけ給ひ我が住ハ深き志願あり檀特山に赴く者
願くハ路を教へと曰老翁倩と太子を見て肩を顰耳是ハ胡乱の者ども無
道無慚の姿に何国より逆のきたるぞ抑此峯と縁ぬ濁世凡夫の通ぬ所に
あらず三蔵別教の霊地なり八恩八智の声聞ハ四諦十六行相を修し四門通行
の道なり菩薩十地の縁覚ハ三世別行の修行を積十二因縁の悟を證し因位果
位三昧三の道を行ひ又緒の菩薩ハ四智四満六波羅蜜の戒行を修し清浄
堅固に行ひ三摩耶形の霊場無上菩提の妙領なり汚穢不浄の
形まく馬に乗鞭を揚て踏あらしとハ言語に絶し悪人なり疾く禁(下平一)と喝令
太子宣ひけ礼を絶し丸無智の凡夫なり不敬の罪ハ恐
ひ先中ハ如く丸ハ心に大願有て檀特山に登り菩提修行の師を需人なり王位を捨
く此所に来り願くハ神仙憐を垂て檀特に登る道を教へと曰老翁宣て

你志ハ健気なれども不浄の凡体を以て檀特の法嶺へ登入と思ふもいとゞ難
ながら遥々此所へ来る志ハ尋ねしまふ行程ハ教得さとこゝ是より西
十里いられば上空臺其嶺の東ハ白雲禁廬を周り金光曜く霊山こそ你が尊
る法嶺なれと指示しく往過り太子女房と引留むひ斯様ハ教示し給へ神仙
の法名を承りたく〻と問ふ老翁打ほゝえみ我ハ是跋迦仙人なりと云へ聽給へと
しくゝ往過る太子御悦喜あり車蓋を勵し馬の口取とらせ御身ハ歩も則
ち山径を杖ゑもたゞくたどらせ給ハ痛ハしく今まゝハ假初の出遊ゆゑ七宝
の室輦ハ傅れ前隨後従の官人非常を紛し草の上ゑ踏ゑる御身の
未世衆生を化度せん爲岩石峩々たる山と分登ゆゑ五彩の糸履岩頭の爲
ハ破ぬ玉よ清た御足ゆ血汐ゆさ玉路辺の草を朱ハ染なし給ふゆゑ車蓋ハ
尽るハ堪るゆ御馬ハ乗せ給へと勧まれど曽て肯ハ給ふ痛る足を曳く〻なれ
嶺深くこけ入る所ハ一人の童子出来り太子を見く〻大いハ驚き是ハ何國より

来る者ぞ衆ゆ此山ハ七佛出世の霊地ゆく牛馬ハ云
ゆ更なり凡俗の通ぬ所なれど北ハ雪山の峯續き南ハ阿陀浄嶺ハ聳ひ嶺ハ
を三條の法瀧落と落林廬ハ二流の霊河漫々と流る加之渓ハ正覚化生の青
蓮華四の時を嬉ぶ花ひらき嶺を過れば菱心門修行門菩提門涅槃門本覚
門等学門真如門とく〻八正道の秘門ありされば不浄結界の法地ゆく三心具足せ
さる者ハ会登入と思ふもとゝ強て登入とせるかゝ正法守護の爲ハ猛獣の爲ハ脅
せしきゆゑ入ゆ入ゆ四五二十とこゝ云捨林廬をまして下りる太子ハ是ゆ仙家の童なしと思
ひ給ひ猶精く行程を尋ね人〻御声を上く呼返し給へ耳ゆもけば疾風の如く
往過れば世人ゆ再び歩を勧ゆ所ゆ嶺より一人の仙人下り来り金剛
杖を太地ハ衝き太子ハ再び車匿を喧しと白眼太膽凡俗なる不浄の身を以て何國
へ往人とせるやと罵りぬ其眼の光星の如く声雷の如くかれ車匿ハ肝消魂飛て路
上ハ蹲り顔色如灰来り太子ハ公然として殘死玉ひぬ神の合掌く礼を尽し

ケ迦陀國迦毘羅城ノ王浄飯王ノ息男悉達ナリ。二度發心修行ノ大願を發シ
宮中を潛出當山へ來ル。願クハ神仙ノ微志を憐ミ檀特山ノ行程を指示シ給へ。
仰ゲバ仙翁冷笑して曰。汝志ハ健気なれども五逆罪ノ身ゾ。父ハ
る。太子曰。我生来生靈を殺ス人畜ハ困ゼ。神仙何ゾ五逆ノ罪人とハ見ズ
と陳ジ給フ。仙翁怒テ曰。汝母ノ胎内ニ在ること三年。行住座臥ニ苦患を与ること無量
なり。加之降誕シテ母を殺シ。剰ヘ大恩ノ父ノ意ニ背ク。慈育ノ継母を舎。三人の新
宮三子ノ女官四門護衛ノ監車ニ入ルまで怠慢ノ科を及ボス。是十悪ノ五逆と
も謂ツベシ。大悪人なり。且其身ニ纏る衣服ハ億萬ノ蚕を煮殺シ糸ニ成テ織リ
木生草を拈ル。染タル不浄ノ衣瑤珞玉帯ハ盡く人力を疲労セシメ造リ設
なる汚穢ノ具なり。奈何ゾ衣鉢ニ汚さる。汝無上正覚ノ霊場ニ到る事を得ンや
ヤ。真実發心修行ノ志あらバ。懺悔滅罪して不浄の衣帯ハ脱捨。従者を追ヒ返
檀特ヘ到ル。荒ラカニ云テ身を翻して森林ノ中ヘ入ル。太子仙人ノ跡を尋ネ
悟ル。車匿を顧て曰。汝ハ我ガ紐を背ク。宮中ハ扶出シ見ヤ。速ニ志ノ如ク
神妙なり。此ノ如ク仙家の法今あれば。汝ハ見より馬ハ牽て回レ。速ニ佩ル
七宝ノ劔を解。頂ノ宝冠を脱。髻中ノ名珠を把ル。投ケ此三品ハ父大王ニ献ジ
告よ。須彌山より高ク大恩を捨。出家得道シ。不孝ノ罪大いなれども母摩耶夫
人解脱ノ為且一切衆生生老病死ノ四苦を救ハ為なれば。省ミ給ヘと謝シ申セ
よ。瑤珞を解。御衣玉帯を解て曰。此瑤珞ハ今ノ母公ニ献リ。多年慈愛ノ
深恩を謝シ。我ガ正覚成道シ。都城ニ還リ再び見ヨ。遺物ニ成ベシと申
よ。此表衣玉帯ハ耶輸陀羅女ニ与ヘ。我ガ妻を念と。又王母夫人ニ孝行を尽
ヨ。悉く遺物を送リ。遺言成就シ。車匿ハ路上ニ泣伏ス。言成
發シ得ざるべシ。涙を拭ヒ太子ニ對ヒ下官君ノ御幼稚より仕ヘ。御出
遊ニ従ヒ室輦ニ添。龍馬を牽。千余里ノ當山まで隨従シ。今更争フ処所
ニ捨ル。回リ給ヘ。願クハ發心ノ御望を断。都城ニ還幸あらン。大王ハ

后宮新宮の御歎をこぞりまゐ。君をば御心ふかどこれ只何國までも召具し奉へ
下官こそ君を捨まうゐ都へ回りまゐ大王其罪を責ひ刑戮を加へ給ふこそ
口惜く淫恣なる寡の御馬犍陵も膝を折耳垂れ黄なる泪を流し頻ふ怨哀の声
を発し別を惜こそ形容なれ太子八道心を動し給ふ声を属して曰くや
れ車匿承れ丸が母公八出産後七日ふく薨し給ふ猶別離あり況
主臣をや況別生別豈異ならん丸が父大王慈悲第一の聖主なり丸が故を以て何ぞ
你成絲し給ふ由なん吏をやまんとす疾く遺物を持て回れと曰へども車匿八猶も
御袖ふるまひて引とゞまる太子茲ふ終に一の方便を廻し宝劍ふ却て成り給ふ斯
不ふ利言を解成もやまけと猶抑留て大願を妨んとせるや丸宮中を出し同よ
り。發心修行成就せずんば誓て宮中ふ又王母夫人ふ見まゐらじと誓たり係を
具せて檀特山ふ至ると雖も到ずんば志願茲ふ空しくなる今八劍ふ伏て死なん
ならんと已ふ抜放ん時八車匿大ふ驚て御手を抑見八縋りまゐり御遺物と賜り

都城回りまゐ。免させ給へと謝まるふ太子よりて劍を捨給ひ給て疾回まゐ丸が
学道成就せば你も犍陵も成佛得脱せむ心強く跡ふ振捨檀特山へ登り給ふ車匿八足を翹て御後影の見えぬまで見送りまゐり声の限り泣叫び馬方
なるふ立上り泣々御遺物を馬の鞍ふ結付綱にて牽ん馬も太子の御背と
顧て。數声嘶き涙を流すこと雨の如。車匿八倍感慨情なる數類まゐり御別を惜
くるよと馬の首ふ抱着まゐ雨と泣くるが果てなれば已事を得ず主なる馬を曳
まゐ。然ども殊勝なる衣なりけり

迦毘羅城騒動車匿献遺物

却説迦毘羅城ふ八其後明て。後宮の嫁女平日の如く朝浄。太子の寝殿ふまゐり
給ふ例八子れ卯寅ふ起給ふふ。今朝八日已ふ高く登りたるふ尚帳を垂て音だに
せざれば是八御不例ふと心騒ぎ三新宮ふ斯と告ふ耶輸陀羅女八其身ひとつふ
心苦く思ふも尚ほ猶ほ顔ふ出ず騒ぎ増てや廬野瞿陀浦の二女八殊更ならぬ

三女ひとしく寢殿に入り給ふ錦の厚衾はれども唯是脱の蟬の如し更に太子の在
さずして各惘果く強まどひ是は何國へ行幸なりやと殿中の間ごとに尋ねまいらる迫
捜しもとめ給へどもさずして益殘なく強ぎ憍曇弥夫人に斯と告ぐ何ぞ殘なく
其侭其所に仆伏声を哭く泣き是を見て三新宮も一千の婇女五百の童女一
斉に泣き怨む形勢天人の五衰を怨むに飛び鳥将軍は斯と聞き狂気の如く其身
殿中を馳廻て捜せども御影さへなしと云て大に気を苛鳥陀夷を以て王宮へ奏聞せ
自身は四門の監率を撿し外吏下司に改むる車匿と犍陵の二人に備へ馬上に
潛出させ給ひ忙しくして居さりける鳥陀夷を息を限りに王宮へ馳参じ太
子宮中を潛出させ給へりと傳奏に就き奏聞せられ浄飯王是を聞給へと等しく苦と
叫び目倒して女官近臣殘なく急に藥湯を持て進を内三大臣も月
卿雲客追々に傳聞て馳参る吏絡繹として迎毘羅城中の騒動鼎の沸に
異なる事なし上を下へと反り返り浄飯王は時を過さずして息吹返し給ひ御泪泉の如

く吏に人吏を弁ずる体なれば三大臣や大王太子を追慕し給ひ嘗慮を悩し給
ひ御理なれども遠くは往き給ひ早く罪人追人の兵馬を差向け還幸なりなん
と云て揃へて練らるるに浄飯王は嘗慮を鎮め給ひ先月景殿へ御幸なりて
宮闈に乗せ給へば官人是を見て先に進む諸臣御後に隨へ月景域渡御
なる憍曇彌夫人は三新宮を従へ龍駕を迎へ給ひ王座へ清き龍顔に對ひ
奉る左右の御対面なり唯伏泣く泣き給ひ太王の瀧津涙を流し給ひ女房は袖を
絞りて御衣の袖に涙を抑へ給ひ朕無くして太子の出家学道の志を
知らざりしに新宮は妹女兒童に至るまで太子を忘れず守護せんと命ぜ給ふ何が
故に吏人に及ぶまで怨みある。蹴野瞿陀弥の両新宮大いに恐れを入涙を止て姿を
妻に妻くの女官と倶に昼は終日夜は終夜太子の左右に侍りて坐る息を休められず迎
八宵より耶輸陀羅女寢殿に参り給ふ物語り給へば心安く打ち休ひ給ふ何時の程
に潛出し給へば稽首して耶輸陀羅女に問せ給へと答へ給へり大王は耶輸陀羅女

太子の行方を問ふ。妃、自ら導びきまつり、吏たちも今更明白なる告げ言葉を聞き、
やがて八妻夜辺寝殿に参り。四方八方の物語を進ずれば、何是の書とりたまへ
よと仰言あるに、御前を立ち書筆の中に尋捜し、幸して探出し献じ奉る。
九此書の中に就て考へる事あり。退出て後刺きれよと曰ふ。退きて寝殿の花の間
に待ち居る。平日に入りて睡眠。我れ夢を結て宮中に出さるを知らずと忘れ罪
謝しまつる。人言の葉のいとぞ速れ刑ぶべきぞ。されば大王歎息し給ひ、新宮妹女が怠慢
の罪深きと雖も、何是云甲斐なき女童なり。四門の監車、何ぞ太子の深夜に出ずと知
らざるべき。烏将軍を召し、厳く結問さるべし。四門守護の者とも恐れ入り前夜に限
り睡眠萌して堪がたく思ひ、守護を怠りしに、草が逃げ、此上、如何なる厳科にも
行ずべしと。烏将軍、此旨奏し、浄飯王に恨果ぬ
ひ。此上八妻追兵を差し向よと。二十万の馬軍を東西南北四道に分ち、太子の即行方
を尋捜しまつる。此度、民間来たりて老若男女大小に殘れ食を忘る業と

捨罪に奔走して泣叫声四境に満ちる。斯く数日過ぎて東南西三方の追兵さ
て手ぶら空して回りたるに、北方に向ひ兵車匿と犍陟を率て回り王宮の厩舎に戻居て
云々の旨を奏達す。浄飯王、車匿を見出し、逆鱗に曰く。如何や汝無き朕が命ぜ
法令を守らざる。太子を奉て城中を潜出しる。今何の顔有てか生ける馬を奉て回る
るや。其罪牛裂にすべき。飽まで太子を何国へ去らせ。速に行方を告よと
責め、車匿恐れ入り奏すらく。下官前の夜熟睡に入り深夜呼覚と声あり。雷
霆の如く。進ぜんと起出づれば、思ひもよらず太子なり。渡せ給ひ疾犍陟を率て
早下宮最不審。何深夜に御出遊の時なれば、特又太平無敵なり。征伐に入り
逆徒なれば、何の科ぞ御馬を召れ難し。太子曰く。汝ら
ぞ無常の殺鬼責来ること速かり。九一切衆生の為に是を降伏せんと。早く
馬を奉れと責め下宮尚も。大王の法令の厳なるを中。烏将軍に通達
せ。後御馬をもらんとやども。敢て宥ぬ。十計尽く守護の監車を呼

人馬声を上て叫べるいなゝる声出されど止て能得ず。寮の御馬を曳出して進もるれ。太子早く馬に召まし。後に續よと仰せ乗出し玉へ。昔来に似ず健陵一声も嘶ぎず。事も鈴も取て鳴ず。こゝも大地を踏事なと龍馬の蹄も只空とて歩むが如くにして尚それよりも不側なるに兼て閉の音四十里の外に響く城門已と開くや一の音もせずそれより馬も下官もさて急ぐ事なく夜の明る頃に八座の霊山に著い後に帝の行程を陳。擅特山の端山の上に星の凡東に向ひ給ひ。恐る〳〵奏して大王宮新宮緒卿まで。半ば信半ば疑ひ只黙然たる外なり。捐有て日光臣車匿に向ひ你太子に隨従して退境に到る。可く捨置なり。鈍そと回り来るなと咎む答て曰さんい件の霊山に到りいにしへ仙翁仙童なる〳〵出来り此山に俗躰凡夫の来ず所なりと疾く回よと喝いるも太子敢て屈し玉ず。密に玉冠髻中の珠を解て曰く此三品に大王に献り。九ヶ学道成就し。再び龍顔を拝し奉るまでの遺物に見玉へと奏し。不孝の罪を謝し奉よと仰せ。又瑠璃御衣玉帯を解玉ひて。瓔珞に母夫人に奉り。是も不孝の程を謝し奉る。衣と玉帯に耶輸陀羅女に遺物に与へ給へ。之去んとして玉を下官に御袖をひかへて深山に年の君我残し給ふ。願くは哀心の御望を捨て王城に回り玉へ。尚還車の御心なく何國まで召具し玉へと再三再四願ひ奉れど聞き許し玉ず。你強て九ヶ嘉に背き哀心修行の妨げなるべ九今剣に伏て死なんと已に常剣に手をかけ。左已事成得ず領掌し。御別を告て玉回りに尚も緒天の加護に馬も下官も蓋を飛ばして。一千三百余里を不日に回りにけり。唯何度も天に向ひ罪を許せ玉へと御遺物を捧げて健陵も膝を折回を流して悲しげに嘶く憍曇弥夫人耶輸陀羅女車匿に物絡を出し玉ひ遺物の品を見に抑當声も惜まず泣給へと並居る女官緒臣まで。倶に愁涙を止めるに。浄飯王は何と思召さん。実に立て坐戦起し給へ。車匿其馬是に奉と紹車匿に召れ是は何の科に御馬を召せ玉

ゐ心ゐ紛り頓ゐも幸得ぎ月光臣大王ゐ對ひ君今馬を召て何國へ御幸ゐむ
と問まる王言を曇ら〜て宣く世上の親心貴も賤も子ゑ思ひ者やある形魂〜
才拙れ子ゑぎぬ愛慈ゐ〜ひゐるゐ增て況朕ゐ太子ハ三十二相八十種好具足せ耳
ならぎと天文地理筭數書画舞楽弓馬扨よび萬藝ゐ達し智ハ古今ゐ秀勤
き〜天下ゐ敵ゐ〜ぬるゐ今虎狼蛇蝎ゐ拙ゐる深山幽谷ゐ入て道を修む豈是を
他ゐ見ゐ忍ん〜や太子在ぎ〜ん傳輪王ゐ位北斗を支る富も何すせん朕も其山ゐ
分登り太子と俱ゐ道を修し難難を二致ゐ〜ぬ先生を文内をゐ〜なりと宣旨ある
月光大臣色を正〜く曰是ハ如何なる勅掟いや君此國を捨むゐ惡悪賢王より連綿
たる血脉斷絶し傳輪王位他人ゐ有となりて萬代ゐ未だ〜不德ゐ譏を遺しゐ
ぎ〜臣熟考へゐ太子学道ゐ御望ある事一朝夕の義ぎてハまじ故奈何ともれを广
耶夫人御懐妊ゐ〜れ相者ゐ十世一勘文ゐ〜ぬ太子降誕ゐ因三十四ゐ瑞悪現し七歩
ゐて獅子吼ゐ金言ゐ三世了達四弘誓願諸法塵内天上天下唯我独尊と曰ひ

し〜れ以ても世栄を楽むべきる夷明ゐ〜且十九才ゐなる世を捨て女色を親者ゐ〜ぎ御
出游ゐ路上ゐ老病死ゐ相を示ぎ〜ん人ぎ總て不側の夷ゐ〜今ゐ車造の奏ぎる
を以て考れば城門已て開れ一千三百余里を半夜ゐ内ゐ到りゐ夷諸天の擁護
なる夷疑ゐ〜ぎ假令深山幽谷ゐ住し猛獸毒蛇も害を加る夷能ぎ〜ぬ俯て
願くハ睿慮を者ゐ太子ゐ御運を天ゐ任し学道成就してゐ〜せゐ同命を
待せむと約を竭てぎ練る淨飯王其練奏ゐ睿慮弛ぎ〜ぬ実汝ぎ十所ゐ理
なり故夫人ゐ夢想ゐ〜ぬ是迦ゐ奇夷を考れば太子ハ朕ぎ子ゐ〜て朕ぎ子ゐ〜
ぎ〜ぬ真ゐ佛菩薩ゐ再生なる〜し迦ぎ〜ぬ朕尚愛慕の念を禁ぎる夷能ぎ〜ぬ
朕年已ゐ老ゐ臨ぎ〜ぬ難陀いまぎ幼し余ゐ王位を譲る〜ぬ者なり是を奈何と
ぎ〜ぬ月光ぎ曰難陀太子御幼稚なれども聰明睿智なれば太子ゐ立ゐ〜ぬ
難ゐ不可なりとぎ〜ぬ且大王いまぎ衰老し〜ぬあるぎ〜ぬ何ぞ〜ぬ睿慮を煩ハ
ぎ〜ぬべしと日光星光ゐ〜ぬ種を練奏し〜れば素り賢明ゐ淨飯王臣下の練

お隨ひ御幸をゝぞまり給へくゝ猶も睿慮穩ならざる智勇勝れ給へる臣下五人を擇出し系穀結帛を下官に運ぶせ車匿を教導して遠く檀持山へ到せ給へども雲霧遮り隔て登る叟能はざれば衆人空しく王城へ立回り斯と面奏し奏れば大王后宮新宮も大いに望を失ひ給ひ其身は宮中に在せども心は檀特の嶺に通ひ天津空とぶ鳥を羨み風雨霜雪に付ても御衣の乾くひまはなりけり実や上古の怨し紀は生別に增者あるべと古記世に言傳へ人も理なりと知るべし

悉達太子於檀特山師河羅仙

却説悉達太子は車匿を四しむひて心細く痛める御足を曳檀特を志して九行程行き給へば翁蒼然たる茂林に著き給ひ一息吐く林中を見入給へば緑苔むして岩の上に端座結印せし老翁あり頭に須彌の雪を頂き面に滄海の波をたゝえ木の葉衣を身に纏ひ眼を閉じ寂莫として太子心に思ふ是必ず發心の師なるべしと徐々と立入給へば上に座し久く待居給へば斯て一時余あり老翁眼をひらき

太子を見給へて曰く何者なれど不淨の肉身にて我が靈場へ来りしぞと太子答て曰く我は中天竺カ伽陀國の王淨飯王の子悉達にて無常の大願を懷き宮中を潛出て師を求め為遠く當山へ来り願くは神仙の法名を承はらん老翁曰く我を檀特山法性淨臺に行ひしなるを阿羅仙なり汝女年其志は神妙なれども恐らくは下根凡夫の身難行苦行捨身行を為し遂る叟能まじ只速に立回り太子曰く愚昧なれども学道の為に身を拋無上菩提の旨を究一切衆生の生老病死の苦を救んと叟を欲しいへども如何なる難行をも修しいひ給へ願くは神仙九を徒弟となし給へ無為の妙道を授給へと身を平伏し阿羅仙の足を礼し仙翁曰然ば汝が其職なる衣服を脱捨仙家の草衣を著せよとて茅萱の葉を編綴なる一衣を与へ給へ太子悦ひ著たる四維穀の下衣を脱て溪へ投捨得なる所の草衣をとって御身に纏ひ仙翁見かへり給へ色成和げ善哉女年汝我が徒弟となる六天母の号たる凡俗の名は可まじ今日より瞿曇汝弥と呼ばれ給へ動て薪水の労を取り仙家の戒行を持よと命じ給へ太

子結て又問むく仙家ゑ戒行と何かる妻をゑ行はるゑ阿羅々ゑ曰先如法戒禪定戒
心地無為戒不生三昧戒六根清淨戒此五戒なり是より三ゑ別行とる同ハ一戒毎ゑ
十戒あつく五十戒となり五十戒又一戒毎ゑ十戒ありて五百戒となり其五百戒又一戒毎
ゑ五戒有て二千五百戒とかる是を自律戒理律戒如律戒と号三種持戒乃仙法く
ゑ二千五百戒の中一戒ゑても破らゑ破戒無慚乃罪人ゑく無為乃修行なり難し係
菩提心修行をゑ遂仏欲せゑ慎て持戒せよ食ハ肉提樹乃菓一日ゑ三粒を喰を
一粒も増喰こと戒絃をと厳ゑ示し教へ先菓を摘水を汲きられよくく藤
造まる笠と大なる瓢と我与そう太子師乃命と受林中を出く山戎国東西南北
戒尋求ゑ敢く菓わゑ摘普く尋廻りゑゑ遥乃渓ゑ若菓生とり是ども絶
壁屏風を立る如く下る乃便なれど壮を立て停をゑ師乃待ゑ入ゑ
恐を樹根ゑとり藤葛を手繰てよくゑ下り若菓を摘とりて笠ゑ入ゑ切岸を
攀登りゑゑ羅綾ゑ纏れ荒れ風ゑあとりゑゑる御身乃ゑる悪所を登

ゑ更られ荊蘇乃為ゑ手足を刺を樹根岩頭ゑ肌膚を破られゑ雪と清れ御
肌も血ゑ流ゑ血ゑ流ゑを痛りとる然ども太子ハ些ども屈しゑを岩間ゑ
ゑ又渓川(下り)瓢ゑ水を汲とり西種を撰て林中(回り)師ゑ供ゑ阿羅々仙是と
ゑれ瞿曇水を汲ゑ浮水乃法あり菓を摘ゑハ三持ハ道あり係心得く菓を摘水を
汲きとりとと向太子曰弟子いまゑ是を不知ハ師命ゑ後ひ取来り阿羅々仙勅
く色を裝て曰夫水ゑハ赤竜青龍白龍三乃主有く雨露を絶く草木生亜是ゑ
依て生育とる妻を得ゑを何を猥ゑ汲減をゑ上三業中三業下三業と号け金剛論
正教論持明論此三昧を修く三龍乃徳を謝て後汲ゑ為なり亦菓ゑハ陽性養徳現
成とく三乃性命あり因く助業三昧雑業三昧正業三昧以上三昧を修く三光論を
を報ゑく摘是敬命乃供養とり然ゑ猥ゑ摘取と無道とも不法とも云人乃
破戒の罪思ひたれやと喝く遷那金剛杖を取とり太子乃頭上肩背乃殴とく下と
撃とくとりさくねゑ傷れ痕を叫く太子苦と叫ゑ仆ゑを阿羅々仙尚も連ゑ撃

阿羅々仙人
悉達太子を
苦行懲を図

程ホ何ハ以て堪ヘ兄。終ホ呼吸ノ息絶エ仙人哭キ孩ヘ気なく。太子ノ骸ホ腰ホ付
稍久く座禅。一念不起満虚空中。木表不滅白道阿字と唱ヘ浮水ノ法ホく太子
ノ白毫を浄め持明ノ法ホく胸を温め善哉々々瞿曇汝彌と呼名を太子忽然
と息吹反ヘ玉ひ夢ノ覚さる心地して起上リ玉ヘ阿羅々仙微笑。你已ホ生を換う
今ハ塵世ノ汚ケ。瞿曇汝彌を改く照普比丘と呼ベ。偖此杖を你ホ渡す。
是ハ遮耶金剛杖と号く。胎金両部ノ功徳を備う。慎で持せよとて授れハ太子恩と
謝。敬ヘ杖を受是を持。玉へば奇なる哉是より身躰健ホなら世玉ひ御身より光と放
ち闇夜と雖も無明ホ小虫ノ這まくるホより。愈信心瞻ホ鉢。遮耶三昧を二六
時中怠を動玉斯く亦或時師ノ薪の為ホ高峯ホ攀登く折ホノ枝を撫て求ね
金剛杖ホ付法臺ハ擔回リ玉ホ阿羅々仙喝て曰。夫山ホ四神あり所謂正明神。物心養
神。虚幾神。咨磨王神是なり。萬ホ千草戎躰して國土ホ利益を。故ホ謝那謝礼
謝。磨加陀く四種ノ法を行ひ四神ノ徳を拜謝して而後ホ枝葉を撫ノ折り

給ふホ你根ホ貪リ欲のなくして此木ハ是折木なれ共戒行ノ虫の栖久ホ心ノく切取こと
殺生戒を破ル。浄無上ノ杖を上一連ホ三十杖擊ル。太子ホ疼痛ホ堪ヘ兼倒
く絶死玉ヘ。阿羅々仙ホ背の上ホ結跏趺座。三時ノ間法を修。其後胎金剛
ノ印を結び天地内外六根清浄無量壽覚般若波羅密と唱ヘ初閑楽ノ印
を結び胸を磨キ。支三度。善哉々々照普比丘と呼。太子再回生ス玉ひ
拜伏して罪を謝。玉ホ阿羅々仙色を和げく曰三度生を換く身神清浄ノ
支を得ル。今ハ浄無上ノ杖を譲ル。受ケ。太子歓喜。玉ヘ
是斜ノ杖を此杖を得玉ひく。六根清く六神通を得玉ひ身光益照勝ル
ホ。阿羅々仙大ホ貴誉く。照普比丘浄光佛と呼ル。太子深く師恩
を謝。玉ひ頻ホ道心を厲。五戒十戒五十戒二百五十戒二千五百戒ホ
ル迫悉く持ち。一戒も破ル行ハ玉ヘ。是より草衣を脱目然ノ木衣と
号く。朱陀羅樹ノ葉を重ね藤の糸を綴る法衣を着。玉ヘ斯ノ如

く身命を抛ち阿羅々仙に仕へ檀特法嶺に苦行し給こと三年の月日を送
り給へども是何の為ぞや。御身の衆花を求め給ふ事おもおろそかにあらず。不老不死の長寿を
望み給ふ事あらず。未世の衆生を利益せんとの大悲願のみ最難有御麦かりなり
悉達太子於般若菩提師伽羅々仙
斯くて或時阿羅々仙太子に對へ給ひて三年の間宜食の修行懈怠なれおとり。五濁
の垢を去五逆の罪を消さ。実母摩耶夫人得脱し。上界の仙女と産生。遂に帝
釋天の后妃に備る。汝一。你正覚成道の後自然と相見まする期有る人此上に上無定
の室般若法菩提に到り。伽羅々仙を師とし。無為学道の秘訣を学究へとそ。精く
教導有れ。太子欣悦に勝ずと。年来の高恩を謝し。別を告く檀特を立
出ひ般若菩提に分登り給ふに伽羅々仙無く更を知。半途に出迎へ照普比丘きた
る支河を渡やと呼ぶ。太子殺れ給ひ忙く跪く仙翁の足を礼し。偖は伽羅々
仙ふくとも。願くは無為正覚の妙道を教授せ給へと曰ひ名を伽羅

々仙曰く汝照普我が此道場の戒行は顕密秘密清浄密く。三密瑜伽の修
行果く言絶不及妙典なれど。甚だ行ひ安く汝よく行ひ給へ。合やと問
太子拝伏し給ひ弟子法味を甘く世業を欲せず無為学道の為に修
身命を抛ん。如何なる難行苦修にも堪へ伽羅々仙善哉と賞し。室に
伴ひ照普を改く妙金利仙と呼。緑の御髪を剃り給ひ藤の太布の法衣を与へ
偖教く曰此所の修行は因位果位三昧なり。三品の行ひ有。亦虚空無為星霜無
為。真如無為なり。三無為の行ひあり。亦不変真如。実相真如。随縁真如なり。三
真如の行ひあり。仏上三々九品の修行不可説不可得の心地に入れば其修行最難
仙食は阿密蘭樹の菓木檀子と号する者を一日に一粒服し一滴の水を飲こと
殘粉さぬ。此峯より巽の方三里彼方に聳る嶺を伽遠那山と号し其山に霊泉
あり。妙法泉と云り。其滝の源に金剛座有り平なる石ありそれを坐禅の林と
一百日は坐し給ひ修行敢く起こる殘粉さぬ。一百日は立ての修行敢く坐する事

を絃さぐと。二百日只仗ての修行敢て睡眠を許さず。行ゐ内ゐ思念なく。行ゐ内ゐ言語なく。行ゐ内ゐ心なし。是自然不生ゐ行相なり。慎で怠る事なかれと指示こと。太子師命を領掌し。伽遮耶山ゐ攀登り。滝ゐ源を尋ね。金剛宝石の上ゐ到り。三箇ゐ行ゐ入ゐ。痛ゐ苦ゐ日ゐ木檀子一粒の他ハ水をだゐ飲まずして。日夜ゐ御肌も日ゐ黒き風ゐ荒唯枯木のごとく。痩衰おびたゝし。三伏ゐ夏の日も冬暑ゐ忍び苦行。厳冬の雪ゐ夜も寒苦を堪へ難行怠ることなく精神を属して行をゐ。むひゐゐ余りの困行ゐ身躰倦疲を思ひ。睡眠を催ゐ。何國ゐ。ゐなく。二人ゐ天童きたり。睡眠ゐ太子を尋ね曰。是なる汝弾ハ法衣を身ゐ纏ひ坐禅ゐ林ゐ在ゐ。無明ゐ睡魔ゐ犯され戒行を破り。ゐるべき是法賊にいざや縛ん。と仰ゐ太子の手を背さゐ。ゐ捻曲黒紀縄を強く縛ぬ。太子發覚むへど猶渠ゐ。せんすべなく。月を閑く席ゐ。ゐ重子ハ縄ゐ端を傍なる枯木の枝ゐ。ゐ。鈎上鈎下を其度ごゐ太子ハ脆も扳折るゐ。疼痛ゐ堪ゐ。絶死ゐハ天童水を灑ぎ蘇らせ。ゐ。何責ゐる。ゐ。必前ゐ悟と。太子余りの苦きゐ声を聞て身ゐ罪を懺悔せんと思召ゐる。ゐ。思ひ。不ゐ。師ゐ縄ゐ行中言を発ゐる。ゐ禁ゐ。むそれゐ可ゐ。ゐ。法ゐ為ゐ責殺ゐ。ゐ。何を露の命ゐ惜ゐ。猶も責苦ゐ忍びてゐ。ゐ。天童捫ゐて曰此汝弾ハ是法賊ゐ。ゐ。其の修行者なり。今ハ縛を免し得ゐ。樹上より鈎ゐ。縄を解く。坐禅ゐ林ゐ置進せ。何國ゐなく去ゐ。太子初て悟ゐ。是諸天ゐ。懈怠を戒ゐ。ゐそ。天童ゐ後を礼拝あり。信精心を厲し難行苦行。ゐこと三年ゐ及ゐ。伽羅々仙太子ゐ勇猛修行を。ゐ。賛歎し。你ゐ信心堅固ゐ。行せゐ。此ハ雪山ゐ到り。毘羅枕志仙尉陀羅大師耶仙二人ゐ道師ゐ事ゐ。正覚成道せよ。你ゐ。ゐ。二人ゐ授ゐ。法論宝錫杖妖真大仏薩如意を授ゐ。曰此錫杖ゐ解化衆生ゐ功徳をこゝ。是を策と。ハ毒蛇悪獸害ゐ加ゐ。諸虫毒を避ゐ。ゐ。道と避ゐ。定下ゐ殺生戒を破ゐ。如意ハ神力自在の法器ゐ。虚空飛行の功力あり

是より雪山へ赴くに八廣野道谷川道山頭道くさ〳〵種々の難道なり。信方堅固にして
〳〵に到りぬと教示し給へば太子歡喜斜ならむ。師恩を謝して雪山へ赴き給ひぬ。

天女霊鬼告因位之善悪應報

斯て太子八伽羅仙に別れ左に如意を把右に錫杖を持て鳴〳〵廣野道と往
給ふ。密に切德ありて躰健に足輕く歩み給へと駿馬の走るとも中疾已に三百千
の路を過ぬ一所に忽然南方より黒煙濃卷來り焔頻に燃て上衝々に迫り来る
みぞ何曳々々と停立ん方に炎の中より無數の餓鬼頭を出さり其形黒瘦く
枯木の枝の如く骨を露し腹のみ大にして眼色憔悴したるが太子を拜して慈悲の
声を出し給ふ事有り如し。太子憐み給ひ一念不生罪福無主本来空無我諸法実
相一切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と唱給へば不測の猛火忽然
と消ぬ。五色の祥雲と変じ無數の餓鬼と成るも端嚴微妙の天人と現じ當
来作佛門生佛果と円音に唱へ光を放て虚空に上りぬ。太子八此瑞應を見て大に歓

喜し給ひ猶も歩を進め給ふに一場の墓原に出給ひぬ。ある一堆の墳の前に端嚴の
天女香花燒花を供じ給ふに仏拜し居給ふ。太子不思議に思召其故を問給ふに天女答て
曰く此所八彼方に茂る杜の中なる伽耶の市の墓所なり。我身八其市人の
子なりしが三年以前に死去し置て世に在し時三宮に供養し六親に孝順し
眷族を恵み憐れむに其八福力に依て上天の楽界に生を受て諸の楽を極めぬ。是を
前生の善心なりと所なれど此古墳の下なる因位の形に香花を供じたりと答
太子之を聞て感歎し給ひ其所を過往給ふに所に亦一堆の古墳の前に一頭の悪鬼在
て墳を發き死人の屍を取出て眼を瞋し焔を吐き咤嚙砕て亦探りぬ
しかに推て居給ふ。太子是を見給ひ你何なれば悪業をなすと問給ふに悪鬼泣て
答て曰我八前生に伽耶の市人なりしが生得愚痴邪悪にして人の盛なる妻妾
人の裏を伺ひ親疎を踈を欺き其悪報に依て今生る鬼畜の生と
受日夜諸の苦患をうける。然て因位の拾骨も恨しく。斯の墳を發き骨

成碎たいりと吾太子嗟歎しむ善悪報の速なること如斯恐るべし〳〵

金剛合掌しむ生死去来即是如夢諸法従本来常自寂滅相故以善悪不

二邪正一如自然真無為と唱へ給ふ伽藍如意を一度揮むに光明虚空に赫々

霊鬼も天女も歓喜し太子を礼拝し先と俱に飛去り斯く太子其所を過て

道成急ぎ程に稍雪山に近づくと覚し岩頭氷凍白又の如く満山雪に埋

まく銀世界に摺たる寒風肌骨に徹り冷気皮肉を裂むかりなれむ殆歩

びつゝ女闍樹下に停立し給ふ天の浄居佛太子の心を厭さんと二人の樵夫となり

椎柴を擔ひまろび出るを太子悦びまひ如何山人是に雪山へ赴く修行者なるが

あまりの大雪に前後を弁ず何年雪山へ登るべき路を教てよと仰せられ樵

夫笑ひ曰不惜身命の沙門なり是だまり雪に何年雪山へ登るべき路を教てよと仰せられ樵

の嶺なり三光秘事の苔の道緒佛正覚の峯なり三の峯跡高く〳〵微妙

不断の法を示し給へ沙跡もなく金剛力の方便に撃るも更に動ずる事なし長

夜の燈なりと吾已身の月明なれ雪王の光なれ奥鱗に水成るべく掘と掘へ

餓鬼に水を尽く掘り天人を水を尽く暗璃なり人間に水を尽く水なれ是成四見

不同と謂り其如く此雪も外道に寒し雪吹と尽く千足凍五躰なり悪魔に刀剣

なれ成ると魂を消し心成恐しむ佛菩薩に法の英を見る下化衆生の慈悲成垂れ

是成法地の三見と謂り厭やく修行者なり雪吹に曝されて矢なれ太つす忍ち悟

ひ尸河薩如意成揚く虚空を指業雲無得如虚空本虚隨如心尸河四頭

行と観ずべし身の光り忽ひ〳〵身躰の凍忘られ行歩心の隨に成り溪を超峯

を攀逐に雪山の法臺に成り暑に御歓限なし

耶輸陀羅女生若宮

却説尸迦陀國伽毘羅城に太子出壓の後をまぐれ浄飯王憍曇彌夫人其他

新宮女官百司百官下萬民なぐ思出し絡出し怨の涙に袖成抜さぬ人なし中に

も長女に成る痛に成る耶輸陀羅女の御身の上なり太子別離に臨み其懐と指

ざ〜三年の後丸ぐ種を生ずべしと仰れども別離の怨ふかきれおろげの夷お思召
そろふ二年そ〜冬の頃より何となく心地例ならぬ日ふ増胎内ふ物あるの如く覚ひ
心を困めむへとも人ふ云ふ事ともよも穢とハせじとそ深〜包み隠〜ふ日ふけそ太子
の御事ハ忘ろ。遺物の御衣と彼片袖を身ふ添て唯帳内ふ引籠り世ハ憂物
ふ勤ハ〜むとも衛々ふ御腹ハ〜ふ包ともれど女官童女ふ是ハ知ぬ所
彼所ふ寄ごとりひそ〜絶合ろ。太子宮中を出むくよりハ已ふ許麦の月日ハ
ぢるふかく重ハ身ふなりむハ何者ふなづさひ如何なる草の種ふ〜ふ日ふけ〜もけふげ
ふ云むへと思ハ〜ハ此道おそと潜言ふ此妻ハ〜月景城ふ〜れなり耶輸陀羅女ハ
密男あり。此頃孕むハ〜と其生ハ維ろ保ろと云觸し東ハ橋曇彌夫人の母ふ達
是ハ異〜の風説ろふ自然大王の耳ふ達し御不審を蒙ハ何とう陳ぜ〜と心
強ハ耶輸陀羅女の新宮ふ到むひ人を拂ひ〜密ふ懐妊の虚実を糺ハ妃
只顔ふ紅葉〜ぐ〜ろ〜むハ〜ふ暮ぬ〜ろ〜包むとれど甲斐なし。斯ろ〜宮ろ〜を

何ハ隠〜ひ〜ハ太子いまだ宮中ハ出ぬ前幾心修行の望あるよ〜ハ結ぶ久
〜ろそ〜て宮中ハ潜出ろ〜丸ぐふろ〜ん後ハ又大王母夫人ふより〜事よと教訓〜ひ
右手の指ふく妾ぐ懐を指むひ三年の後孕ろと有て男子を産ろ〜是丸ぐ遺子
なれと慈ミ育よと仰れども只御別の怨〜ふ堪ハ〜ハ思ふ只管ふ出離の御望
ハ止ぬとれども遂ふ諾むハて宮中ハ潜出させむひね其後ハ深ハ歎ハふ〜ハ其
御身ぐふ忘ぬ侍ふ年月を〜心地例ならぬ日ふ増て身重くなりをてゆれおろね憂
名さ〜呼まこれる身の怨さ。推量せむへと絡り。身ハ伏て泣ろ橋曇彌夫人宮ハ
奇異の思をなり羊ハ信〜羊ハ疑ひ〜ハ其〜奏ぬ〜〜ふ自の御坐ふ即ろせ
むひ烏将軍の妻ハ怒ぬ。耶輸陀羅女ふ物語のふ妊娠の夷を養ふ安ぬ浄飯王
紛リむひ太子ハ擁者ふく未生怒前ふ〜り衆の奇特あれ〜さる不測の夷絶ぬ〜
とハ云難ハ〜ふ三年の月日経ぬ〜妊娠ぬる夷疑ひ〜ハ〜ふ宮中ハ出入ぬる男子
を悉く結問ぬ〜と命じむ烏将軍ハ妻王命を領掌〜ぬ五回り夫人ハ斯

と達しそれぞ耶輸陀羅女ゑ仕る女官ども。三新宮ゑ仕る者を一人仕く呂寄く向紀
ゑ。物弁ぬ女ども。ゑ已ゑ隨思よりなく言成やおぞ。実言しも虚言とも給ぶとく
今ちぐさく。せんをぐなくて捨置きるるゑ。遂ゑ臨産乃時きち玉乃如ぬ男子降誕おろ
羅睺羅尊者とゆハ此若君なり。太子世ゑ在く宮位ぬ受爵おいて御子たちぬ満朝
乃百官緒乃王より慶賀乃使者門前ゑ市をなをつぬゑ。雖有て是ぬ祝ぬる者な
く。却く種々ゑ紙繒しるるゑぞ。耶輸陀羅女乃心ぐしさ譬なく。世ぬあぞぬ乃物ゑ思
ひ弥引篭り居く心ひとゑ若君を。太子乃御遺子と撫傳憂ぐ中ぬる楽き草ゑ
生しをゑ。も他の人さも思ぐど。全ぐゑ捨種よと無下ゑ見扱く。ぬぐく紡
来る人もなぬ。ゑなりとてゆぬ世ゑ云甲斐なく明暮しをゑ。おぬれ此若君乃成
受しむ。母子とも連いゑる深山幽谷ぬも尋ねん一度太子ゑ見しめもくとぜきいぬと
ぐゑ。あぐぬる月日を送り来御心根を痛しうぬ

悉達太子苦行雪山降魔軍

再頌悉達太子八嶮岨絶壁を徑く雪山乃法臺ゑ歩く者を所ゑ一人乃異人樹下ゑ
端坐し妙舎利仙我你を待と久しと乎乃ぬ太子此人をんゑ髪髭髪悉く黄色ゑ
て両眼乃光り明星乃如く。顔色薄紅なるゑ木の葉を藤乃糸をて編綴たる法衣
ぬ穿ち。手ゑ一條乃如意をとれり。太子思ゑらく是ぞ鞞羅梵志仙なるぞして
袖乃紀合せく礼拝しむひ仙意の如く弟子ハ妙舎利ゑ願くハ神仙無上正覚乃教を
示しむへと曰仙翁曰ぐ善哉妙舎利我くそ鞞羅梵志なり。抑此峯ハ緒天宇を覆乃霊
地ゑく東八九織本覚臺西ハ法性妙覚臺南ハ妙織等覚臺以上を雪山乃三臺と
習り不惜身命乃難行しをとるぞ。常参日中殺参しく。日ゑ三乃行おり過邪金
剛部三昧般若蓮花部三昧寂静佛部三昧ゑ三業九品乃勤行一日ゑ懈怠ぬ
るゑ成免ぞ。生より臺ゑく十里乃行程あんぐ合せく三十里儲ぬ室を呂て北
真禅定臺ゑ乃朝ゑ出く夕ゑ此室ゑ帰り。夜ハ石上ゑ跏趺坐し。定心浄心寂一
然心妙真心真無心此五定心を煉く緒天ゑ飯食せよ今日より妙舎利を改く雪

山闇利と呼ばれたり。一点も怠慢の心を生ずる事なれと教諭し。隱然として虛
空を歩こと去ること太子其後を礼拜し。むひ是より日本に三業九品の勤行をなし
三業を行ひ廻りむ。其道路悉く雪降積寒風の厲しき事天地を覆ふこと疥
癩一日も白日を見ることなく。氷凍く剣しきも尖れる岩角を踏こけ。行廻りむこと
日々に四十里。夜は北堂に回りて坐禪の眠に睡を凌ぎ終夜諸天に祈命し。素り
火を焚かれど一滴の湯を求むる便もなく。唯て粗の食もあらむと魚諸天諸佛
の字護に依て。室に回むで温るる香風吹きて。身を温め食を断むとも
気満て餓に臨むとも一心不乱に行ひ。ある時三十三天の中第六
天に魔王在るに。遥に下界を直下し。悉達太子の雪山に在て昼夜を拾ひ苦
行し給ふを見て。大に驚き彼所に。信力堅固なれば久しく正覚を得
ん。然るに必ず法論を博に切衆生を利益し。佛法世に熾に行ん。我が眷
属彼を為に因れば遂に道壞乱せんと憂慮し。樂まず。此太子に三人の女有

長女を欲妃といひ中女を悅彼といひ女女を快観といふ。三女又太子の憂愁の色
々を見て其故を問。魔王其水末を説せられば。三女涙を流し曰。王憂の事
妄に三人下界へ下り色香を以て悉達を惑はし淫欲を以て其戒行を妨げん
と。太子大に悅び此義甚だ善し。急ぎ悉達を惑せよと命ずるに三女領掌し
て玉の瑤珞を頂き天花を挿し五彩の衣服を著飾り妙香を芳せ十二天に班い
て下界へ下り。夜中雪山の北堂に入て太子を礼拜して曰天帝君の孝年の苦行を感
じ給ひ上界の中に才智秀容顔勝れる者を擇て太子の薪水を扶へ給ふ。妾に
三人其擇に抽られ茲に来り侍ると媚を含情を作て。其声頻伽鳥の囀
る如く其顔美容の露を含む如く。如何なる石心鉄腸の者も香色の為
に湯とする。太子は一点も心乱動せず自若として定心を煉て居まる。魔女
猶も其行を妨んと二個の玉盆に菓を盛て。太子に捧て曰是は天帝御園の搖る
一菓を食する者八百年の齢を保ち十菓を食する者千歳の壽を延る仙菓也

君に献りて延年不老なるべき所なりと巧言を勸めれども。太子猶恐れをなして応ぜ
ず年若行の功徒ふるつて六神通を得ん。疾く王の行道を妨んと讒言する
を知るべし。如意を揚て外面仮善薩陀心如夜叉と唱へて忽ち玉の言葉と
なり。盛なる仙菓も毒の毒虫と変じて。三女とも花の面貌霜の如く消醜悪の老
婆となりて面皺腰屈をなるべし。一日に面を見合て大に驚き捫摸さんとせ
ども触れば周障振猛虚空をさして逃回り又に絹して其惑をなす。魔王
大いに怒り其義なるを我雪山に至て渠が行法を妨んと罵る。魔王に四子有
薩陀と号。諸般の神通を得たり。依て又大王に謂て曰。悉達行力堅固なり。何
程の更の者なれ愚男眷族を従て下界へ下り。悉達が魂を拉ぐ。菲恐修行を
止らせんと乞。大王其紀を壮なりとして是を許さるべ薩陀悦び喜び大軍を
招き集め。下界へ降り雪山の堪堂を百重千重に囲む。悉達早く王宮へ回り摩倫王
の位を践んと。摘正覚を得んと欲せば身を叱咤して猶に応ぜん。太子一点も

動じ給ぬ。徐に四面を見廻し無数の大軍北臺の四面に充満し其輩頭牛の如く角八
利刀に似て身肥大なる者あり或八面三眼にして口より焔を吐者あり或八頭三目六有
て毎手弓矢剣刀鎗戈戟を把者あり或八凋面一眼にして口血盆の如く一身に生ずる毛八
鐵針の如くなる者あり或八丈高く腰大にして鑞の如く爪を生ぜる者有其他種々奇
怪の悪人牧牽をなす。皇帝は火焔を降し悪風を吹。霹靂天地に裏れ山河草
木震動して世界も目前奈落へ沒なんと疑ふ。怖しかりし。太子を
公然として獅子の麓群に居るが如く。唯是小児の戯をなす。其尺丈の如く大軍倍
怒激して進て青竜の太子を殺せんとす。其時太子微妙の声を発して諸悪莫作
修善奉行と唱へ給へば。不側や大軍の刀鎗千戈鉤の如く曲りて用る事能ず。前と成つ
者八中途より飛回りて却て大軍を射石を投擲んとする者八敢て手を離ず。火を
降せば五彩の花となり。毒霧を降せば香風と変じ。更に太子を害する更能ず。
薩陀案に相違して周障惑ひ眷族を率て這々第六天へ逃回り悉達の行力當

ぐ〻と雖ども王大いに怒り斯て八叶じと此般自身百千眷屬を率連れ雪山に降り
北甚に近き窺ふる太子石上に端坐して身動ぎもせず王左手に鐵の
大弓を握り右手に鈎の如き箭五條を手挾迅雷の如く惡声を發して曰く汝悉
達遥に稱名に依て適淨飯王の子と生れながら何ぞ王位富貴を捨て無益の無爲
道を需め山中に餓死せんとする早く悟て出家法を捨て故郷に還り博論王と
なり榮曜歡樂を極め美妻美子を以て安心せよ迷ひ正覺を
得んと世々我此一箭に你が命を斷ん你ぞ梵天帝釋諸天神も我が
弓箭を奪ふ能はず魂を消し肝を落して怖惑り豈況や你が於ては只速に去れと
罵りぬ太子眼を開き見給へば其丈三丈余にして雲に跋扈し兩眼赫々として日輪
の如く出る如く鼻孔を振まぐ裂くる只血池のみ鋼々上下四
十根の齒は劒を植たるごとく疑れ鬚髮悉く鐵針に似たり其後に百千の眷
屬惡鬼惡拘尼等各眼を瞋り身を咬ぎ器械を奉り隨ひ太子怯

ぐ〻と雖ども虛空を震動し梵天帝釋四天王も護
法善神諸天將天龍八部に至るまで瞬の間に來降り箭を放ち喊を發し軍に
向ふべき大王大いに狼狽身を翻して逃回れば衆の眷屬も途を失ひ八方へ散亂しぬ
然に於て太子如意を收め天部諸將も天上へと昇り多見等始めて全
百般千般の方便を以て太子の道心を妨げんと計るも太子の石心動ざる事須彌山の如
く信力堅固にして雪山に修行し給ふ事六年に及ぶ

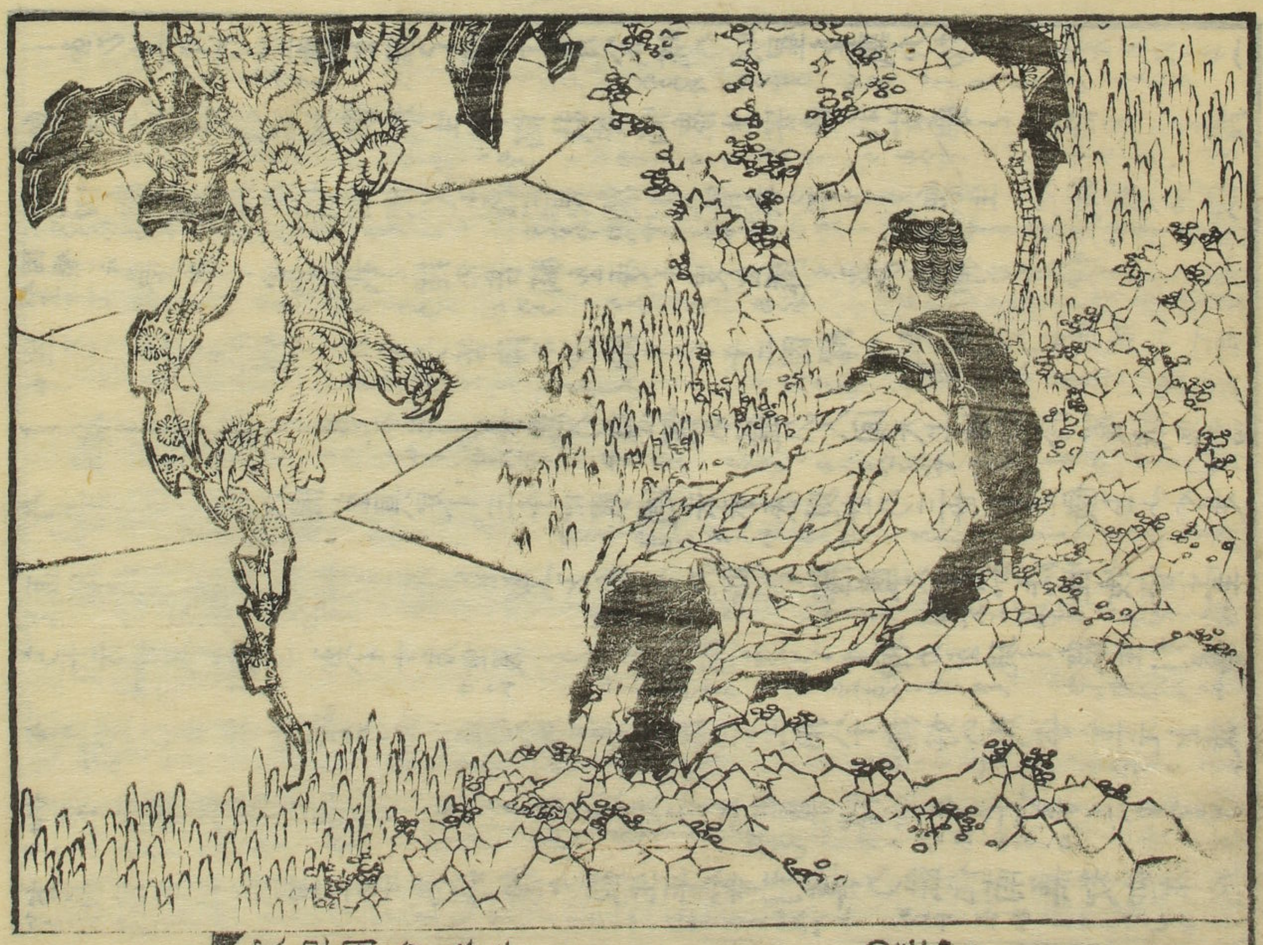
悉達太子得罰偈正覺成道

太子雪山に苦行し給ふこと六年の星霜を經まで遊陀羅仙師耶に見
えて如何に一相見て正覺成道の奥義を究んと山中に願ひ例の如く三臺
を廻り法性の峯に到る所に遥の溪底に虛空に響く大音あり諸行無常是
生滅法と唱へり太子聞て大に悅び是正無爲成道の要文なり是を唱る者
凡人なりと察しる尉陀羅仙なるべし名を拜竭せざるべからず雪を踏み水を分

く深溪の底へ尋下りぬ。唯見其丈三丈許なる悪鬼八面九足あつく眼中火の
如く只紅蓮の池の如くなる岩頭に腰掛て吐息嘯の加し太子些も恐れず悪
鬼に對て曰即今の二句の偈を唱へ汝なる悪鬼答て曰彼の太子曰猶おきりの偈
有や否や。悪鬼曰猶二句の偈あり太子曰速に我に唱へ聴せよ悪鬼曰往古閻浮
提に大國の王あり名を脩摩婆と号く富天下を保ち財宝を散して億兆の民を
撫育し恩沢遍く及ぶ只是一世の仁恵おしむ所久遠の恩に報ずる能歓なる正覚の法を説く所
導師を求む毘沙門天王其心を察し化して後ち王となり。緒の悪相を現し彼王宮の
門に到り王の為に正覚の法を説んと呼ぶる大王歓喜し殿上に請じ法を聞んことを望
ふ。夜叉曰我今甚だ餓たり王の寵愛の后妃并び皇子我に与へ食べ
鉢王の為に妙法を説人王是を許諾し即ち最愛の夫人并び皇子を召出して
夜叉に与へ夜叉即時に王の妻子を裂喰ひ而後正覚の法を説こと実其如く我も
腹中餓たり汝我に食を与へ我に残りの二句を唱へ聴せよ太子曰汝今如何なる食を

欲するや悪鬼曰我唯人の肉を欲す汝残る二句の文を聴せ欲せず我が口
中に入て食とすべし然て我汝が魂魄に唱へ聴せ太子欣然として曰。他の
命を借て自の命を救助す。他の命を貪て他の命を惜む。
とあり自分て他なり。自他一如と悟る時何ぞ命を惜むべきや身を躍て悪
鬼の口中へ飛入るべし不思議や悪鬼の口裡の利歯忽ち八葉の蓮花と化して安
坐せり生滅既に寂滅為楽と唱へ今まで悪鬼と見えしも忽然として
雲に従て毘盧遮那佛と現じ。太子を掌中に居て法性宮殿に移す。誠に
我は悪鬼にあらず。尉陀羅ぞ師耶に。本来は毘盧舎那佛なり。御身前後十
二年の戒行怠りなきに依て今已に正覚成就せり早く世に出て天人倶に利
益しまへ。と合掌礼拝しまへば。倉率に虚空に音楽聞え五彩の花降て十方三
世の諸佛三身五智七佛其他五十二菩薩諸天善神。梵天帝釈四天王天龍八
部に至るまで空中に遍満し合掌悦しむ。異口同音に三界六道の教主十

八面九足の霊鬼
悉達太子と試て四句の偈を授る圖



分最勝光明無量三学無碍億々衆生平等引導の能化南無釈迦牟尼
如来本師本仏と唱へ奉る。是より悉達太子を。世尊。釋迦牟尼如来と八十なり
給ひ。五十三年御望の如く。正覚成道したひ。三十二相八十種好の御姿金光を放
ち十方世界を照し給へば。十方世界より光明照らし給ふ十神力を現し。衆生引導
直指成佛道の本願を充させ給ふ。難有き斯く釋尊八真如法性妙覚堂
の上ふ。三明六通を具足し。三千世界過去未来現世の三世を見徹し給ふ是
より彼ふ生し。彼より是ふ生し。善悪の業報ふ隨ひ人間天上地獄修羅餓鬼畜
生の六道ふ流轉し。死生の苦海ふ沈淪し十二因縁の欲有。色有。无色有。四趣。受。
受。触。六入。名色。識。行。无明。
因縁云夢永く覚ず我と緒の苦脳を受る吏を隣さ給ひ我神力方便をもつて廣
く一切衆生の此煩悩を救ん。それ三界衆生ハ皆我が子なり。衆生入地獄我入地獄
衆生出地獄我出地獄衆生苦悩我苦悩衆生安樂我安樂と大慈悲心を發
し給ひ十二年の星霜を徑く。頃八十二月八日。曉の明星を戴て初て雪山を立出給ひ一

世ふ出山の釈迦と唱へ字しなる八此時の御姿なり

三加葉師釋尊

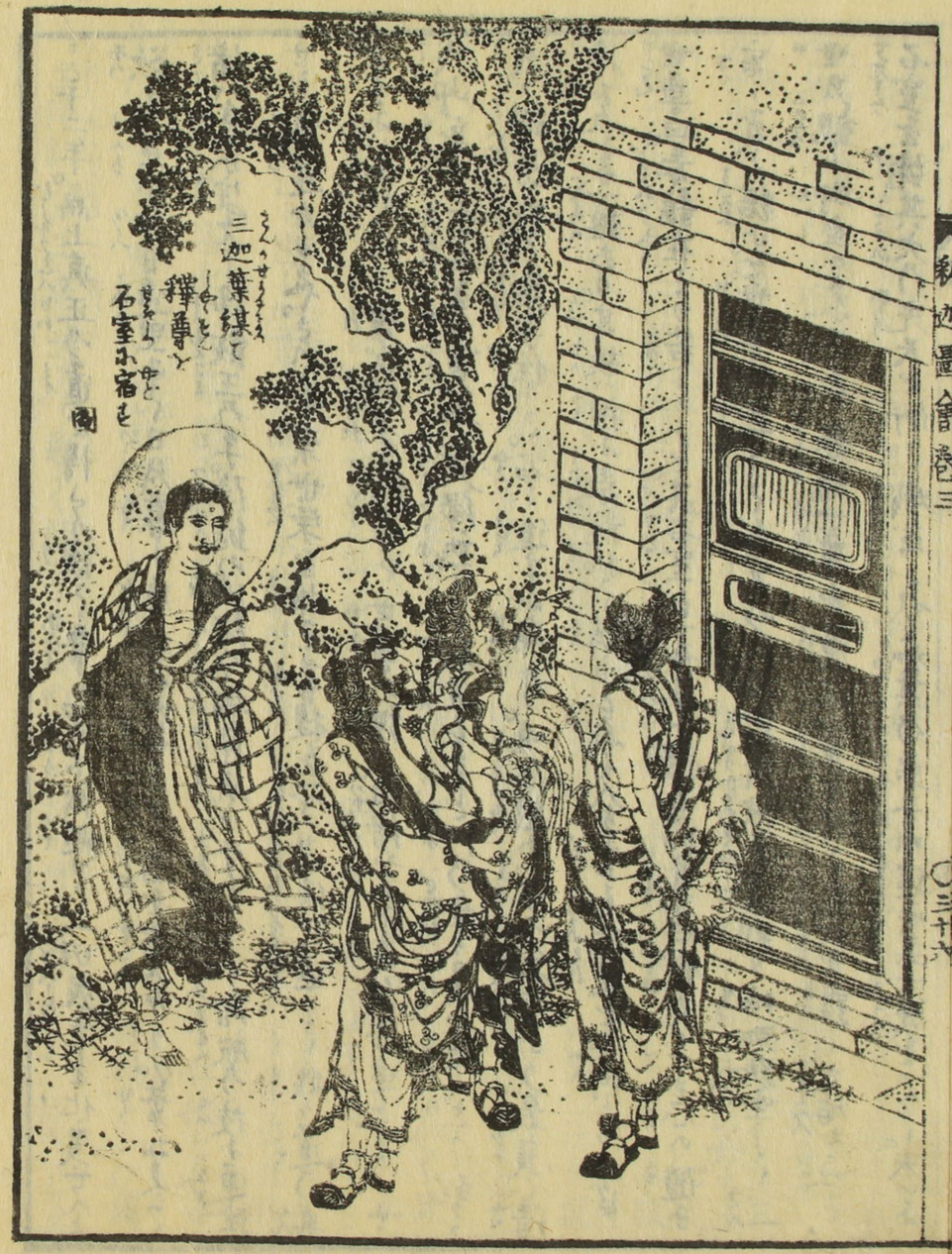
斯く釈尊ハ雪山を出給ひ波羅那國ふ到り給ふ女し餓ふ臨み給ふ天の淨居佛
是を察し化して道士となり。跋利村と云里ふ到り主人ふ謂て曰ク迦陀國淨飯王
の太子悉達。菩提心修行の為ふ身命を抛て十二年。今已ふ正覚成就し一切衆生
を濟度せんと頓て。這里を過ぎ給ふ。你ふ供養しまつり無量の幸福を得よと仰げ
ば。土人悦び密数を網く待居まつる。程なく世尊きさらせ給ふ。土人是を見
まつるふ光明輝き威相荘厳世ふ類なれば。歓喜踊躍し佛足を礼拝し敬て密
数を献る。世尊悦び給ひ受給ふ。善なれば心中ふ念じ給ふ。過去の諸佛皆
鐵鉢を以て食を受給ふ鉢を以て是を受給ふ。如意を以て虚空を飛給ふ。天
上より四天王各一鉢を捧て佛前ふ降り来る。世尊ふ念じ給ふ。予一王の鉢を受なば
残る三王本意を失ふ。不如四鉢ふ受給ふ。茲ふ於て四天王の鉢を悉く受四の鉢

を掌の上に置祈念して忽ちに合して一鉢となり四の重員のみ残りて僧土人の
密数を受ひ呪願して曰く三寶供養の絶主當来あらんに安樂无病多福長壽
来世ゆく人天に生て緒の快樂を受んと唱へ密数を喫しおひ而して鉢を洗ひ嗽て土
人に二飯を授ふ一曰飯依佛二曰飯依法三曰飯依僧と土人に道喜の用を流し恭敬
礼拝して去る。斯く世尊は波羅那國鹿野苑に於て四天王の為に四諦の法を説
法輪を轉ひ給へり。鹿野苑を遶り給ふ日將に暮んとす。れ
依て優樓頻螺に行へ給ふ倚て宿を乞ふ。此優樓頻螺といへは名を加葉といひて。兄
弟三人あり。俱に仙道を学ひ火に事へ神通廣大なり。國王より萬民まで崇敬する
こと師父の如し。然て加葉心中に天の下に我に勝る者あらんと自負して年老たる汝
弟門に停て二宿を乞加葉諾て是を迎へ入対面もする。三十二相具足せり好相なれば
是凡人にあらんと思ひ向て曰汝は何國より何里へ通る者なるや。世尊答て曰我は大伽陀國
の主浄飯王の子悉達なり。曾て菱山菩提の道を求め擅特雪山に山に修行する

て十二年。無上真正の道を得たり。依て曾て四天下を廻りて一切衆生を化度せんと
欲す。然に今日遥里に日没暮に尊者の大名を聞んかり。加葉和尚
偖は音に聞えし浄飯王の子降誕の因緒の瑞應現じ学をして緒般の技に通達
せり。悉達なるやいまだ凡夫の渠世家を捨て菩提を学ひ其道迂遠にして我の道の真
なるに如不如。渠の行力を試んと世尊に謂て曰偖は名に高貴悉達太子
我が御身の當名を告て夫人。天縁熟して相見まること何の幸ぞ是に過ん。
我が緒房悉く弟子住て。宿に進ぜん。唯後園に一宇の石室あり最貴清
浄なれども一難あり其故は裡に毒龍棲て稍もすれば人を害す我是を奈何せんと
世尊曰毒龍在ども若し其石室を一夜乞に借むへ加葉曰厳に心の隨に
宿に任せて緒に世尊欣然として童子の引路に從ひ彼石室に到り結跏趺坐して三
世を観ず御坐に果して毒龍世尊を害せんと身を搏て猛火を発して大煙を吐く
石室を焼其火の光天を衝く燈然 乃ち加葉の弟子に遥に其大光を見て大いに

三迦葉
世尊ヲ
敬順
の圖

三迦葉繼て
釋尊ヲ
石室ニ宿ス



殘免師が斯と告げれば加葉室を出大光を見手を拍て笑て曰醫王一汝彌毒龍の為
が害せしきぬと急が弟子が指揮一石室の辺りが到り。水戒燒死大を消一むまじくも敢
て消されず其尽捨置て問りそり世尊が猛大の毒龍を殺り来るが動一むなど。編然と安坐一
むひ毒龍が對一喝一丈が毒龍忽ち俄の小蛇となり働く支能など世尊是をうつ鉄
鉢の裡が置三飯依を授むが斯て天明が及んで加葉緒弟子を従て石室が到りぬが
石室已が灰燼となれども世尊自若として在ぬ。加葉殘れ御身夜来毒龍の為を殺
殺るなどと問世尊微笑一むが毒龍大を殺一て石室を燒と云ども毒ども尊が真正の
金剛躰を燒失を得人予毒龍を降伏て已が茲が有と鉄鉢の裡を指示一むが加
葉大いが殘れ此沙弥が神通侮られども我が道の真なるが不如て別を苦く本所
が回ぬ世尊が加葉が我慢心を折て佛道が敬伏せ一人と思召れば其日も留りて樹
下が坐て終日座禪す一夜が至まで四天王来降て世尊が説法を聽ある各王
光明を放ち日月が光よりも猶明なれば加葉が弟子が亦這が是を見捌て曰什麼

毒龍が汝彌已が降伏せ一が今宵亦火光あるが何等が光ぞ一人が師が糸が往て斯と
告げれば加葉が紛り弟子と俱が潛が到て窺が四天王来降て説法を聽居むが但一
弟子が光明のみが其尊容を見る支能ども加葉が親く見て歎息一おが。猶
飯伏が心なく本所が回ぬ世尊が彼が裝起を七日迄待ぞ一て停りぬと都て七日が
至りぬ其夜ぞ梵天帝釈緒天緒菩薩天龍八部来降て説法を聽む
が。毎夜世尊が御坐が四面光明赫々と。加葉が毎夜が此奇特を見ず一七日が至
て初て慚愧後悔一恭敬が神通廣大なると我が及ざる支遠一と。慢心を退け二
百五十人が弟子と俱が世尊が前が到り恭敬礼拝て曰願くば大知識我が輩を教導
むと願れば世尊善哉比丘と賞一むが髪を剃せ袈裟を著せ此們が為が四諦法
論を轉一て是が依加葉法眼淨を得阿羅漢果を得とり此義を史傳て加葉
が二人が弟那提加葉。伽闍加葉が二百五十人が弟子を率て佛弟とり各
法眼淨を得阿羅漢果を得とり

洞無青經

京黃甫